

令和 5 年 6 月 6 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00098

研究課題名（和文）性の多様性の理論的基礎づけ：ラカン派精神分析の観点から

研究課題名（英文）The Theoretical Foundation of Sexual Diversity in Lacanian Perspective

研究代表者

原 和之（Hara, Kazuyuki）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：00293118

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：ジャック・ラカンが1950年代にその『セミネール』で展開した、前エディプス期からエディプス期に至る心理-性的な発達過程の再定義、所謂「欲望の弁証法」の議論を、その前提にまで遡って読み直すことにより、それが男性的な同一化のみならず女性的な同一化をも、一貫した、そして臨床的な観察と合致する仕方でも記述しているものであることを具体的に提示し、この一般化された欲望の弁証法が、彼の1970年代の所謂「性別化」の議論における女性性の規定にまでつながる射程を持つことを示すとともに、性同一性と性対象選択の二つの水準における性の多様性を統一的に説明するモデルを提供する可能性を持つものであるということを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義はまず、男性的ないしフェリス的な偏向が指摘されることの多いラカンの1950年代の議論を、その本来の一貫性において捉え直すことで、それが女性的な主体の性の引き受けをも説明していることを明らかにした点にある。またこれにより、時期ごとの変遷を強調されることの多い彼の思想について、その議論の通底ないし一貫性を見て取ることで新たな視座を提供することが可能になった。さらにその理論的な射程の拡張は、女性性のみならず多様な性のあり方にまで及んでおり、それらを発達の「固着」や「停止」とは無関係に位置づける理論的枠組みを提示している点で、社会的な包摂にも大きな役割を果たすことが期待される。

研究成果の概要（英文）：By rereading Jacques Lacan's discussion of the so-called "dialectic of desire", in which he proposed in the 1950s a redefinition of psychosexual or libidinal development from the pre-Oedipal to the Oedipal stage from the viewpoint of language, going back to its premises and reconstituting them, we demonstrated that it can explain not only masculine identification but also feminine identification in a way that is consistent and compatible with clinical observations, which also allows us to argue that this generalized dialectic of desire has a scope that extends to the definition of femininity in his 1970s discussion of "sexuation", as well as the potential to provide a unified model for explaining sexual diversity on the two levels of gender identity and sexual object choice.

研究分野：西洋思想史

キーワード：精神分析 フロイト ラカン 性の多様性 エディプス 欲望の弁証法 性別化 クィア

1. 研究開始当初の背景

精神分析家ジャック・ラカンの思想を中心に、精神分析と哲学思想の関係をフィールドとして研究を行ってきた申請者は、2013年のフランスにおける同性婚法制化の際、国論を二分する論争のなかで精神分析家らが果たした役割に注目した。彼らはその取り組む分野に議論の蓄積のある子供の性的発達に、同性婚が与えるかもしれない影響について意見を求められていたが、ここでは同じラカン派の中でも賛否双方の立場から主張がなされるという現象が起きており、それらの主張とその背景にある精神分析の理論的構想との関係が注目される事態となっていた。

ラカンが1970年代に展開した「性別化 (sexuation)」の議論は、シニフィアンの観点から性差を論じようとするものであり、その限りで性の生物学的な決定という考え方から距離を取りつつ性を考えることを可能にするものであったが、他方でその議論のなかにはあくまで異性愛を前提としていると理解することの可能な個所があり、その点で批判を受けることもある。こうしてラカンの議論が性の多様性を考えるうえで、革新的な側面と保守的な側面のいずれをも持つということが、上述のような現象の背景にある。

申請者は先行する研究において、ラカンの1950年代の『セミナール』における、エディプス・コンプレックスの再定義をめぐる議論を集中的に取り上げる機会があったが、その中で彼の議論に沿って考える限り、父母の規定と男女の規定が独立したものになるという点を指摘していた(1)。父であり母であるということがもし男性であり女性であるということと独立に成立しうるとすれば、異性カップルによる養育と同性カップルによる養育で、その条件に本質的な違いはないということになる。これは性の多様性をめぐる議論にラカンの精神分析理論がもたらさうする一定の貢献ということになるだろうが、その一方でこの議論が異性愛規範を前提としない、性同一性や性対象選択の多様性に向けて開かれたものとなるかどうかという点については、未解明のままにとどまっていた。

ラカンの議論について、性の問題の解明という観点からの評価を見た時、1970年代のとりわけ女性性に関する独自の議論が肯定的に言及されることが多い一方で、1950年代の議論は概してそのファルスを中心に据えた議論が一面的ないし硬直的なものとして、否定的に捉えられることが多い。そのような中、申請者は上述の指摘の延長線上で、この1950年代の議論をその本来の文脈に置き直して整理することにより、その議論が1970年代の議論へと直接に接続することが可能になる、という着想を得ていた(2)。そうしても、その男性中心主義をしばしば批判されるラカンの1950年代の議論が、その前提にまで立ち戻って捉え直されることで、1970年代の女性性の解明につながる射程を示しうるとするならば、こうした拡張がどの範囲まで及ぶかが次いで問題となる。

2. 研究の目的

以上のような社会的・理論的背景から、本研究はジャック・ラカンの1970年代の「性別化」の議論を、1950年代のエディプスコンプレックスの再定義に遡りつつ解体・再構築することにより、性をその多様性において統一的に説明することのできる理論的な枠組みを構築することを目的として構想された。

3. 研究の方法

ラカンのテキストを、性の引き受けないし性別化の問題を中心に調査すると同時に、この点に関する彼の議論を、ラカン派および他学派の議論、さらにフェミニズム、ジェンダー・スタディーズ、クィア・スタディーズからの批判等の調査・検討を踏まえて読み直すことで、性の多様性の問題についての彼の理論的装置の射程を明らかにする。

4. 研究成果

ラカンが1950年代に展開したエディプス・コンプレックスの再定義の作業は、フロイトが論じたエディプス期と、フロイト以後にメラニー・クラインらが照明を当てた前エディプス期を合わせた発達論の全体、いわゆる「《エディプス》(l'Œdipe)」の過程を、「言語」という統一的な観点から説明しようとするものである。この「欲望の弁証法」をめぐる議論は、主体の性・心理的な発達を、その身体的な発達から直接に規定されるものとしてではなく、主体が出生直後から直面する問題を、自ら解決しようとして行う試行錯誤の過程として理解しようとするものを見ることができる。《エディプス》をいわば三人称的な視点ではなく一人称的な視点から再構成しようとするこの議論において重要なのは、この過程の本質的な契機として、主体が他者に欲望を想定し、その欲望を知ろうとする、「解釈」の契機が組み込まれているという点である。『セミナール』の議論では「想像的ファルス」の「公準」という形で具体的に現れているこの契機を起点として、実際ラカンは《エディプス》を、想定された他者の欲望を知ろうとする営み 他者の

「言わんとすることを知る」ことを目指す「聴取」という言語的営みと類比的に考えることができる営み として、一貫した仕方の説明しようとする。

「欲望の弁証法」の起点に位置づけられる、他者 の欲望の対象としての「想像的ファルス ()」の主体による想定は、「愛」と「知」の特異な絡み合いの瞬間として位置付けることができる。出生直後の主体は生命維持に必要な諸々を自ら行うことができない状態にあることから、彼にとってはそれを可能にしてくれる 他者 が重要になる。その 他者 の現前を求める主体の欲望は、原初的な「愛」の姿を規定するものだ。ところがこの現前が常に保証されるものでないことから、主体はその不在の、ということは現前の原因を問う中で、他者 に欲望を想定し、その欲望の対象が他所にあることが 他者 の不在を導くようになる。ここで 他者 が欲望するという事態は、その対象を通じて 他者 の現前が統御可能になる限りにおいて、望ましい事態である。換言すればそのとき主体は 他者 が欲望するということを欲望する。コジエーヴの言うのとは異なったこの「欲望の欲望」を、ラカンのはちに「(愛の)要求(demande (d'amour))」と呼んで特定することになるだろう。他者 の現前の欲望としての愛から、その不在の原因の知の欲望へ、さらに不在の原因たる 他者 の欲望の欲望としての愛から、他者の欲望の対象の知の欲望へ、という愛と知の往還が畳み込まれたこのファルスの「公準」という契機は、「愛 - 知的 (philo-sophique)」と呼ばれるに相応しい契機となっている。

さてラカンの『セミナー』、とりわけ『対象関係』(1956-57)および『無意識の形成物』(1957-58)の議論は、この契機から出発して、主体の発達に一つの道筋を浮かび上がらせている。

主体は 他者 の欲望の対象を考えるにあたり、それをまず自身の身体的な欲求の対象に象って考えるだろう。こうしてまず、主体にとって喫緊の問題たる摂食と排泄という場面において焦点化される対象をめぐる 他者 との関係が模索される、前エディプス期がスタートする。

しかしその模索によっても 他者 の現前の維持という根本的な目標が達せられないことから、主体は 他者 の欲望の対象について、それが身体的な欲求のうちに見いだされるとする仮説を変更し、それを自身の欲望のもう一つの水準、すなわち 他者 の欲望の欲望の水準に求めようとする(主体は身体的な欲求の対象を欲望するのみならず、他者 の欲望を欲望(すなわち要求)してもいた)。換言すれば、他者 の欲望しているのは欲望である、とするこの仮説の変更から、本来のエディプス期はスタートする。というのもここであらたに導入される欲望とは、最初の 他者 とは別の 他者 のそれであり、これは慣例的に、最初の 他者 が「母性的」と形容されるのに対して「父性的」と形容されるような 他者 であるからだ。

この父性的 他者 の導入により、主体が直面する問題はその焦点を移動させる。原初的な問題である母性的 他者 をめぐる問題は、その欲望の対象たる父性的 他者 の欲望の問題に変換される。ただ主体はそこでジレンマの状況に陥ることになるだろう。というのも父性的 他者 の欲望は、母性的 他者 の現前を統御することを可能にする手段たる限りで、永続することの望ましいものだが、それがあくまで父性的 他者 の欲望として永続する限り、それは母性的

他者 が主体のもとから永遠に不在となることを意味する一方で、主体自身がそうした欲望を支え、あるいは体現しようとしても、彼自身の欲望の有限性はそれを許さないからである。

こうしてあらためて袋小路に入った主体は、模索の前提となる仮説の再度の変更を余儀なくされる。それは、母性的 他者 が欲望する父性的 他者 はその特異な欲望ゆえにではなく、その名前、すなわち《父の名》ゆえに欲望される、とする変更である。このとき《父の名》は、母性的 他者 の欲望の対象たるファルス()の保持者の「証明書」ないし「証書」として理解されているが、これによって母性的 他者 を繋ぎとめる手段ないし審級が安定的に確保されるとともに、主体は同じ名を持つことで、将来その地位を占め得るという見通しを得ることが可能になる。フロイトは《エディプス》の終期に主体のエディプス的な行動が目立たなくなる、「エディプス・コンプレックスの没落」の現象を報告しているが、これは主体にとっての 他者 の問題が解決されるからではなく、むしろ将来の解決の見通しが与えられることで「棚上げ(aufheben)」されるからだと考えられる(3)。

さて上で素描された一連の過程は、父性的 他者 のポジションへの見通しによって締め括られることから、男性的な性同一性の成立に対応するものと看做すことができる。これに対して女性的な性同一性の成立はどのように考えることができるのか。《エディプス》の再定式化が集中的に展開される『無意識の形成物』では女兒の《エディプス》も論じられるが、そこではE・ジョーンズら同時代の分析家による議論の批判的吟味が中心となり、「欲望の弁証法」の前提に基づく独自の展開にやや乏しい。他方同時期の講演「ファルスの意味作用」は、本来密接に関連しているはずの《父の名》による「父性隠喩」と「ファルス」(4)とを切り離して専ら後者をめぐって議論を展開している。それが「ファルス」を絶対的な項として立てているかのような印象を与えることが、この講演を参照する論者らによって、ラカンの「ファルス中心主義」が指摘される原因となっているように思われる。

そこでわれわれは、あくまで「欲望の弁証法」の枠組みを維持したうえで、臨床的な観察としてはメラニー・クラインの女兒の《エディプス》についての論文を利用しつつ(5)、そこから女性的な性同一性の成立に至るような過程を導き出せないかを検討した。

「欲望の弁証法」の枠組みを規定するのは、出発点にある身体的な欲求の対象の問題であり、その解決の可能なエージェントとしての 他者 であり、それを介した解決が実現しないという仕方でも再定式化された問題の解決をめざして想定される、他者 の欲望である。この欲望を別様に想定し「解釈」するところから、もう一つの解決の系列が導き出すことが可能になる。

すなわち 他者 を介して身体的な欲求の対象が与えられないのは、他者 が別の対象を欲望して他所に行ってしまうからではなく、他者 がその対象を与えようとしない、すなわち与えないことを欲望しているからである。この前提のもとで可能な主体の対応とは、そうした 他者 の欲望を破壊し、対象を解放することによって、これは主体にとっては、対象を伏藏している母の身体を破壊しその対象を略奪する幻想としてまず生きられる。しかしこの幻想的な解決は現実の解決につながるのではないために、主体は次いで母性的な他者から「向き直り」、別の他者 へ、すなわち最初の母性的 他者 に対して「父性的」と形容されるような 他者 にその満足の対象の贈与を求めることになる。この局面は主体にとって、与えられることを決して止めないような、誇張的に理想化されたファルスの幻想を通して生きられるわけだが、そうした終わりのない贈与が原理的にあり得ず、与える 他者 としての父性的 他者 もやがてはや与えぬ 他者 となり、母性的 他者 のポジションに舞い戻ることになるために、そこでは二つの局面の交代が、循環的な袋小路を成立させることになる。

この袋小路から抜け出すためには、主体は二重の象徴化に訴えなくてはならない。すなわち主体は一方で、無限の贈与者としての想像的な父性的 他者 にその象徴的な近似を、すなわち《父の名》を保持した有限な贈与者の無限の系列を置き換えなくてはならない()。これは男性的な同一化とは異なったポジションから将来における贈与の待機を可能にするものであり、父の子供を持つという幻想という形をとるだろう。他方で主体は 他者 たちへの直接攻撃に、母性的および父性的 他者 の間の「相互破壊」を置き換えなくてはならない。これは「より間接的な様式の表現」として、主体が報復への恐れを回避することを可能にするもう一つの象徴化であり、クラインが「サディスティックなマスターベーション幻想」の第二範疇として指摘しているものに対応する。

一般化された「欲望の弁証法」	
問題	解決
必要とするもの(欲求するもの)が得られない。	Kトラック(女性)
母性的(他者)からの助けもない。「裏切なき(Hilfslosigkeit)」	
問題の定式化	理想的ファルスの(公理):問題の「原因」として母性的(他者)欲望およびその対象としてのファルス(φ)の想定
欲望する(他者)の理想化:主体が必要とするものを選んで与えるが、主体ではないような何かφを欲望しており、その際より他所に行ってしまう(不在となる母性的(他者))	φ 欲望する(他者)の悪魔化:主体が必要とするものを欲望し、それを与えることを欲さない母性的(他者)
考えられる解決	母性的(他者)が何を欲求するか(=φ)を知り、φを入れて、母性的(他者)の現前を維持する。→ 仮説1:φ=何か(口唇的ないし肛門的欲求の対象)
問題	上記の解決が、所期の目標を達しない。すなわち:
問題の再定式化	欲望の対象では母性的(他者)を引き留めておくことができない
考えられる解決	φ=誰か(ヒトすなわち父性的(他者))=欲望
問題	上記の解決が、所期の目標を達しない。すなわち:
問題の再定式化	永遠の欲望を主体は現実に見出すことも体現もできず(現実的な(父)、また仮に見出したとすれば母性的(他者)を決定的に失うことになる。
考えられる解決	持機(「エディプス・コンプレックスの消滅」、問題の解決ならぬ「働き」)
問題	象徴的解決の再問題化

こうして 他者 の欲望の想定に基づいた、問題の仮説的な定式化とその解決の試みの繰り返される過程としての「欲望の弁証法」には、図1の左列と右列のような、少なくとも二つのトラックを区別できる。これらのうち、とりわけ右列の女性的なトラックにおける循環的な二局面とその二重の象徴化が、1970年代の性別化の図式(図2)における、矢印の二重性に対応しているように見えることを指摘しておこう(6)。性別化の図式の男性側の説明で、フロイトの所謂「原父」の神話がしばしば参照されるのに対して、女性側の説明にはそうした神話的な参照項が欠けていたが、われわれがラカンの理論的枠組みとクラインの臨床的観察に基づいて試みた再構成は、そうした欠落を補う可能性を示すものだということができる。

この「欲望の弁証法」の一般化により構築された性別化のモデルからは、性の多様性についてラカンの精神分析理論が持ちうる射程について、以下の四つの帰結を導き出すことができる(7)。

図 1

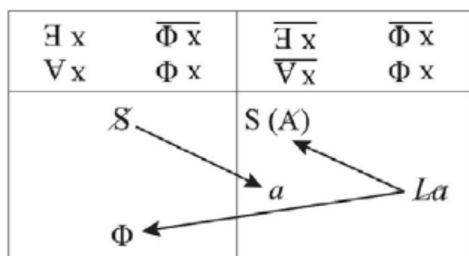


図 2

主義的ではなく、機能主義なものとなる。母性的 他者 とはその欲望を知ることが主体にとって死活的に重要な 他者 であり、父性的 他者 とは母性的 他者 との関わりで導入されるもう一人の 他者 であるという仕方でも機能的に規定され、いずれもその生物学的ないし社会

1. 純粋に心的な両性性:

フロイトが人間存在に基本的な両性性に言及するとき、彼はしばしばその根拠を身体的な両性性に求めていた。これに対してわれわれの「一般化された欲望の弁証法」は、そうした外的な参照なしに純粋な心的両性性を考えることを可能にする。それによれば我々は男性的な同一化と女性的な同一化の両方に原理的に開かれているのだが、それは出発点となる 他者 の問題に対して、二つの「解釈」が同様に可能であることによる。

2. 父母の区別と男女の区別の切り離し:

さらにわれわれの観点からは、父母の区別は本質的に異なる。母性的 他者 とはその欲望を知ることが主体にとって死活的に重要な 他者 であり、父性的 他者 とは母性的 他者 との関わりで導入されるもう一人の 他者 であるという仕方でも機能的に規定され、いずれもその生物学的ないし社会

一般化された「欲望の弁証法」	
目標	ラカンの「母性」を「父性」に置き換えること
理論的還元	ラカンの「母性」を「父性」に置き換えることとしての「父性」の「母性」の還元
考えられる解決	「母性」を「父性」に置き換えることとしての「父性」の「母性」の還元
目標	ラカンの「母性」を「父性」に置き換えることとしての「父性」の「母性」の還元
理論的還元	ラカンの「母性」を「父性」に置き換えることとしての「父性」の「母性」の還元
考えられる解決	「母性」を「父性」に置き換えることとしての「父性」の「母性」の還元
目標	ラカンの「母性」を「父性」に置き換えることとしての「父性」の「母性」の還元
理論的還元	ラカンの「母性」を「父性」に置き換えることとしての「父性」の「母性」の還元
考えられる解決	「母性」を「父性」に置き換えることとしての「父性」の「母性」の還元

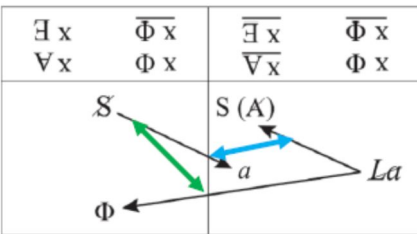


図 3

え主体が最終的に到達する性的なポジションは、この最初の分岐にのみ依存するわけではない。というのもそれぞれのトラックには、同型の「他者」が位置しているのであって、この「他者」にはそれぞれのトラック上で可能な対応が存在しているからである。換言すれば、これらの同型の「他者」が、トラック間の転輸機を果たすことで、一方のトラックから他方のトラックへの移行が可能になるとするならば、これはトランス的な同一性の成立機序を説明する仮説を提供するものになっているように思われる。

以上の諸帰結からは、ラカンの理論的装置が性の多様性を受け止める一定の可動域をもつことが示されたと言えるが、同時にいくつかの新しい問いも生まれてきた。とりわけ上述の帰結の2からは、《エディプス》の終わりに主体は一つの性同一性に到達するが、そこから二種類の性対象選択の可能性が等しく開かれているということが出てくる。このことが含意しているのは、性対象選択の問題が、性同一性の成立後に提起される独立した問題である、ということに他ならない。とはいえ両者は全く無関係というわけではなく、女性的ないし男性的対象は、男性的ないし女性的ポジションに到達した主体にとって、母性的なそして父性的な「他者」とのかかわりで開かれた空間の中で、しかしこれらの「他者」と単純に同一視されることなしに規定されるのでなくてはならない。その規定がどのようになされるかという点について、われわれは現時点ではラカンが1970年代に様相論理学を参照しつつ展開した議論が手掛かりになるという見通しを持っている。この見通しに基づいて、今後も引き続きこの点の解明に取り組みたい。

- (1) 原和之, 『ラカン 哲学空間のエクソダス』, 講談社, 2002年.
- (2) 原和之, 「フロイト=ラカンにおける「不安」: 構造論的アプローチとその射程」, 『I.R.S. ジャック・ラカン研究』, 第12号, 2014年12月, pp. 65-87.
- (3) 「エディプスコンプレックスの没落」『フロイト全集18』(岩波書店, 2007年) p. 306.
- (4) Jacques Lacan, *Ecrits*, Paris, Editions du Seuil, 1966, p. 557.
- (5) 「女の子の性的発達に対する早期の不安状況の影響」『メラニー・クライン著作集2: 児童の精神分析』(誠信書房, 1997年) pp. 232-233.
- (6) 原和之, 「性の多様性に向き合うラカン 「もう一つのエディプス」から出発して」, 『I.R.S. ジャック・ラカン研究』, 第17号, 2018年9月, pp. 20-43.
- (7) Kazuyuki HARA, *Théorie, dialectique, fantasme: La sexualité comme le prolongement des "théories sexuelles infantiles" par d'autres moyens*, Institut humanités, sciences et sociétés (IHSS)/Société et humanité/Université Paris Cité, 2022.11.22.

学的な属性とは無関係に相互の関係によって定義されるものとなる。

3. 性対象選択の原理的な複数性:

精神分析にとって「愛」に関する公理にあたるものが、「幼児期の範例を反復していないような恋着など存在しない」というフロイトの主張だとするならば、これは古典的なエディプス・コンプレックスの図式「男性的主体における母への愛着と父との敵意」と組み合わせることによってはじめて異性愛規範的な立場を導くものとなる。これに対してラカンは「欲望の弁証法」の議論において、父への関係には敵意だけでなくまた愛もあると主張する。父性的「他者」が欲望し続けることを欲望することという形で現象するこの不可能な「父への愛」を、ラカンはやがて同一化の条件として明確に位置づけることになるだろう。さてもしそうだとすれば、それぞれのトラックを最後まで走り切った主体の背後には、残りなく満たされることがなく、したがって反復される二つの愛の関係があったということになる。帰結の2から、これらを直ちに女性的あるいは男性的な対象への愛と同一視することはできないものの、少なくともここからは、一つの性的なポジションに、発達の固着や「停止」とは無関係に、複数の型の対象選択を対応させることができるように思われる。

4. 性的同一化の過程の可能な分岐:

一般化された欲望の弁証法の主体は、「解釈」する主体であり、「他者」に欲望を想定する主体である。そしてその想定に二つの可能な型があることから、主体は二つのトラックに分かれて進むことになった。とはい

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 原和之	4. 巻 17
2. 論文標題 性の多様性に向き合うラカン 「もう一つのエディプス」から出発して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 I.R.S. ジャック・ラカン研究	6. 最初と最後の頁 20-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 4件/うち国際学会 4件）

1. 発表者名 原和之
2. 発表標題 精神分析理論への同性愛の可能な包摂のための前提的問題について J・ラカンの議論を手がかりに
3. 学会等名 表象文化論学会第15回研究発表集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kazuyuki HARA
2. 発表標題 The Other "Track" of the Dialectic of Desire in Haruki Murakami 's 1Q84
3. 学会等名 Workshop "Psychoanalysis, Literature and Film Redefined: Dialogues with Professor Jean-Michel Rabate (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kazuyuki HARA
2. 発表標題 The Problem of the Object in the Light of the Lacan 's Dialectic of Desire
3. 学会等名 Cornell Psychoanalysis Reading Group Conference "The Objects in/of Psychoanalysis" (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kazuyuki HARA
2. 発表標題 Theorie, dialectique, fantasme: La sexualité comme le prolongement des " théories sexuelles infantiles " par d' autres moyens
3. 学会等名 Institut humanites, sciences et societes (IHSS)/Societe et humanite/Universite Paris Cite (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 白百合女子大学 言語・文学研究センター 編 井上隆史 責任編集	4. 発行年 2021年
2. 出版社 弘学社	5. 総ページ数 158
3. 書名 アウリオン叢書20 身体と身体 パフォーマンス・批評・精神分析	

1. 著者名 Jean-Michel Rabate (ed.)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 266
3. 書名 Knots : Post-Lacanian Psychoanalysis, Literature and Film	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 日本ラカン協会第22回大会シンポジウム：「クィア精神分析」の可能性：精神分析とジュディス・バトラー	開催年 2022年～2022年
---	--------------------

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------